

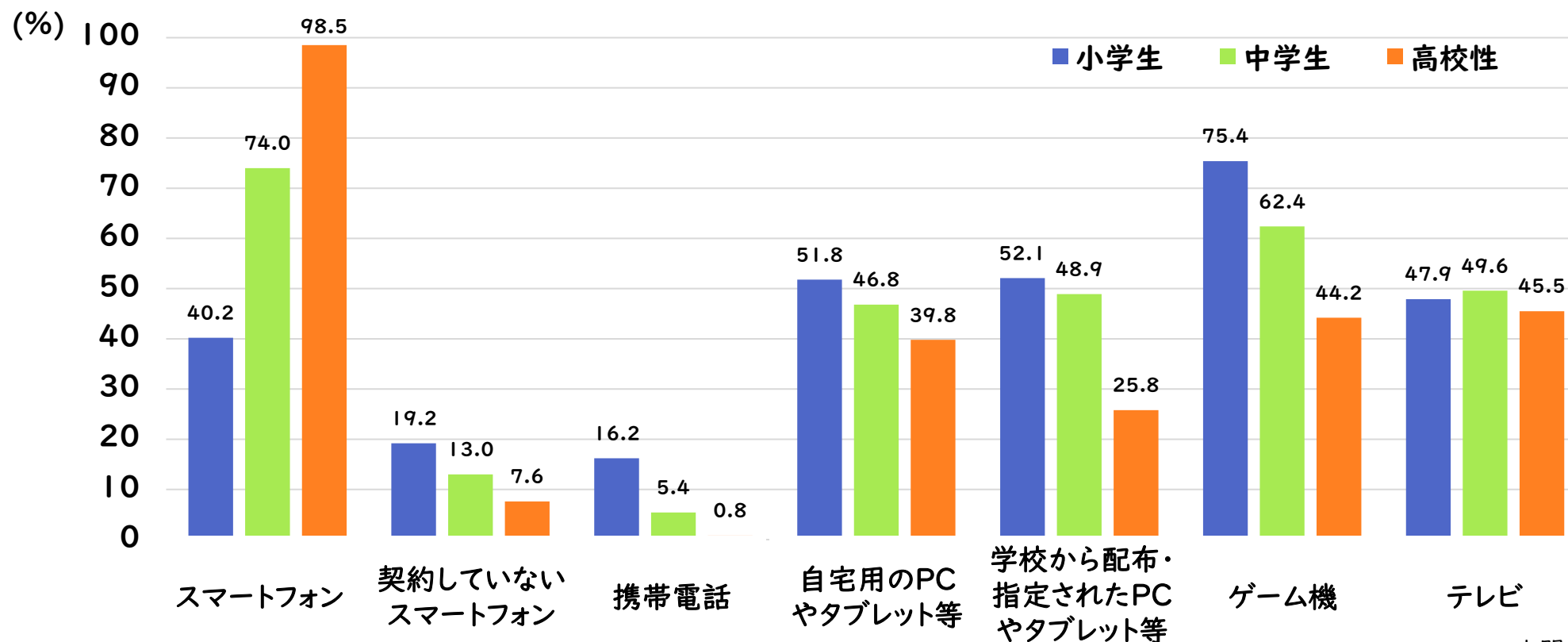
# 高校生の「つながりっぱなしの学び」の実態 及びその効果に関する要因の検討

東海大学 田島 祥

共同研究者：登本洋子（東京学芸大学）・堀田龍也（東北大学）

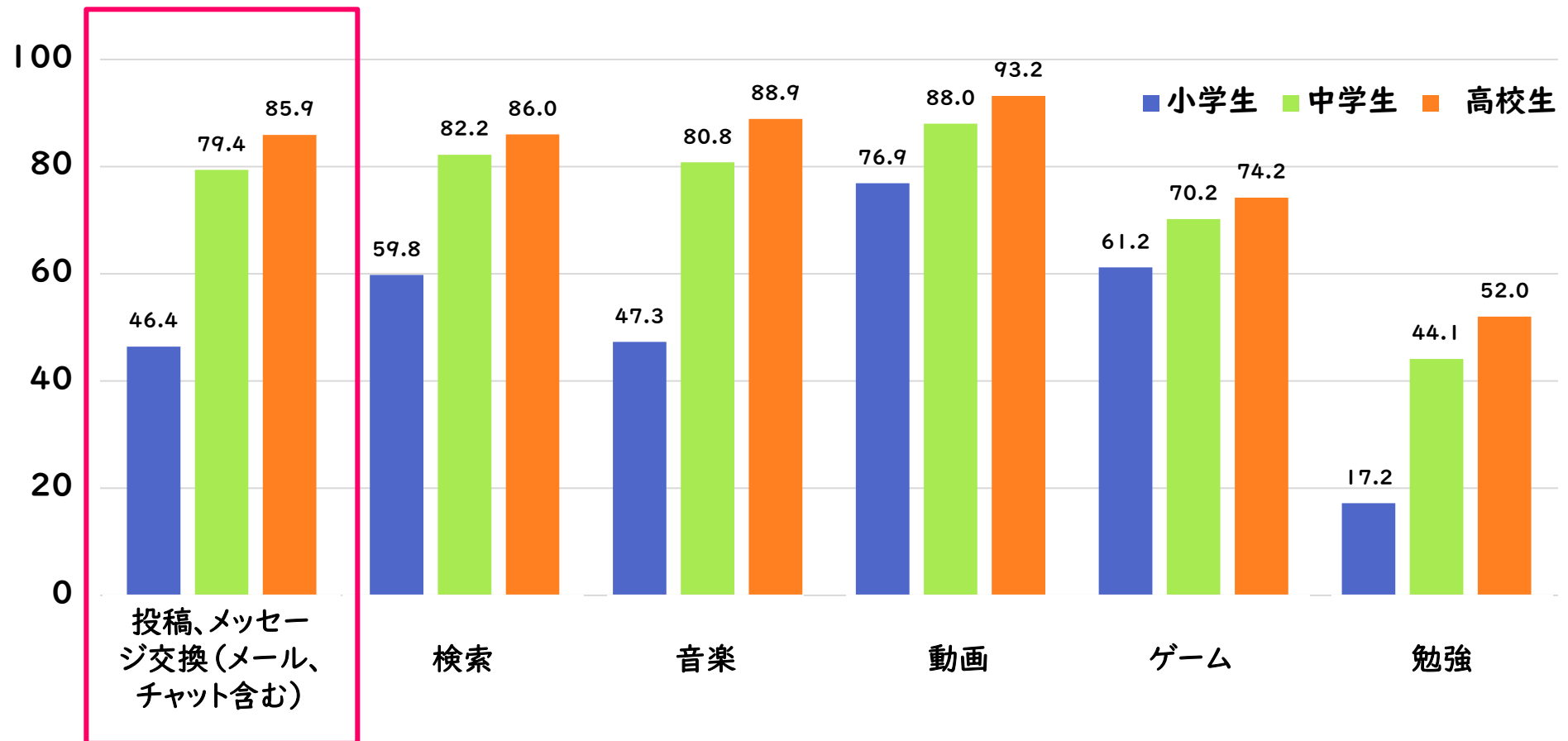
# 生活に欠かせないインターネット

- 子どもたちにとっても高い利用率
  - ・小学生96.0%、中学生98.2%、高校生99.2% (内閣府, 2022)
  - ・高校生はスマートフォンでの利用率が特に高い



# スマートフォンでのインターネット利用内容

- 中高生は、動画、音楽、検索に続いて、コミュニケーションを目的とした利用も多い(内閣府, 2022)



# 携帯電話・スマートフォンと対人関係

- フルタイム・インティメント・コミュニティ (仲島・姫野・吉井, 1999)
  - 携帯電話が日常的に利用されるようになった初期の研究
  - 若者の携帯電話利用に関する調査より、  
携帯電話は、特別に親しく、普段から会っている友人や彼氏・彼女との  
コミュニケーションを一層緊密化されるために使われており、心理的には  
24時間一緒にいるような気持ちになれる「フルタイム・インティメント・  
コミュニティ」を創ることを促している と解釈
- その後の研究でこの仮説に沿った結果が示されている (e.g., 橋元他, 2000)

# 実際に“一緒にいる”ことが実現できる環境に

- 技術的な進歩

- ・携帯電話からスマートフォンへ
- ・インターネットの常時接続
- ・コミュニケーション手段も多様に：通話、テキストメッセージ、ビデオ通話  
etc.



『他の人（友達や恋人、先輩・後輩など）と、お互いに別々の場所にいながら、電話や音声通話、ビデオ通話・ビデオチャットをつなぎっぱなしにして過ごす』

## 状態に着目

会話をしたり、一緒に動画を見たり、勉強したり。

あるいは別々のことをしながら、ただつながって時間を共有することも

# 本研究の目的と定義

## 【本研究の目的】

- ① 高校生の「つながりっぱなし」の実態はどのようなものか
- ② 「つながりっぱなし」経験者はどのような特徴をもつか
- ③ 「つながりっぱなし」での学習に対する認識はどのようなものか

- 「つながりっぱなし」の定義：他の人（友達や恋人、先輩・後輩など）と、お互いに別々の場所にしながら、電話や音声通話、ビデオ通話・ビデオチャット（LINE、Instagram、カカオトーク、zoom等）をつながりっぱなしにして過ごすこと

\* 「つながりっぱなし」は、つながりっぱなし（回線がつながっている状態）に加え、つながっている実感を伴うもの。  
調査では「つながりっぱなし」の用語を使用

# 方法：調査対象者・手続き

- Web調査会社が保有する高校生モニター対象。2022年12月に実施
- スクリーニング調査
  - ・学校に通っている15～18歳
  - ・2学期(9～12月)に、週1回以上「つながっばなし」をしたか
  - ➡ 「経験者」と「非経験者」を抽出し、本調査を依頼

	性別			学年			計
	男性	女性	回答しない	1年生	2年生	3年生	
経験者	67	145	6	77	64	77	218
非経験者	148	150	30	110	99	119	328

※「非経験者」は男性・女性に偏りが無いように割り付けた。不適切回答・矛盾回答がある場合は除外した

※「経験者」の男女比はモニターの男女比を反映。「女性の方が経験者が多い」とは言い切れないことに注意

# 方法：使用する変数

## 【目的1】 つなぎっぱなしの実態について

- ① 使用したツール： LINE, Instagram など9種類
- ② つなぎ方：“音声のみ” “音声+カメラ” の程度。 4件法
- ③ 相手との関係：“普段から会っている友達” “普段は会えないが、会ったことのある友達” 他8種類
- ④ つなぎっぱなしにする時間：学校がある日、ない日それぞれ9件法
- ⑤ 心のつながり：心もつながっていると感じるか。 5件法



# 方法：使用する変数

【目的2】「つなぎっぱなし」経験者はどのような特徴をもつか

- ⑥ メディア利用時間：学校がある日の平均的な利用。4種類10件法
- ⑦ 放課後の過ごし方：“部活動” “アルバイト” 等、6種類10件法
- ⑧ 友人への欲求：友達との付き合い方について。友人への欲求尺度（榎本, 2003）15項目、6件法 \*因子分析で先行研究と同じ3因子を抽出  
「相互尊重欲求」「親和欲求」「同調欲求」
- ⑨ 友人と一緒に勉強する頻度：2学期（9～12月）の間に他の人（友達、恋人、先輩・後輩など）と一緒に勉強した頻度。5項目、7件法

# 方法：使用する変数

【目的3】 つなぎっぱなしで一緒に勉強することについて

⑩ 相手との相互作用：友人との学習尺度（上淵 他, 2016）19項目

4件法 \*因子分析で先行研究と同じ3因子を抽出

「意図的な協同学習」（例）学習内容でわからないところの教えあいをする

「雑談」（例）雑談してしまう

「他者意識」（例）見られている（聞かれている）ため、寝たりだらだらしたりしないようにしようと思う

⑪ 勉強の効果に対する認識：ひとりで勉強するよりも“集中できる”  
“成果があがる” “やる気が出る” “頑張れる” 程度、4件法

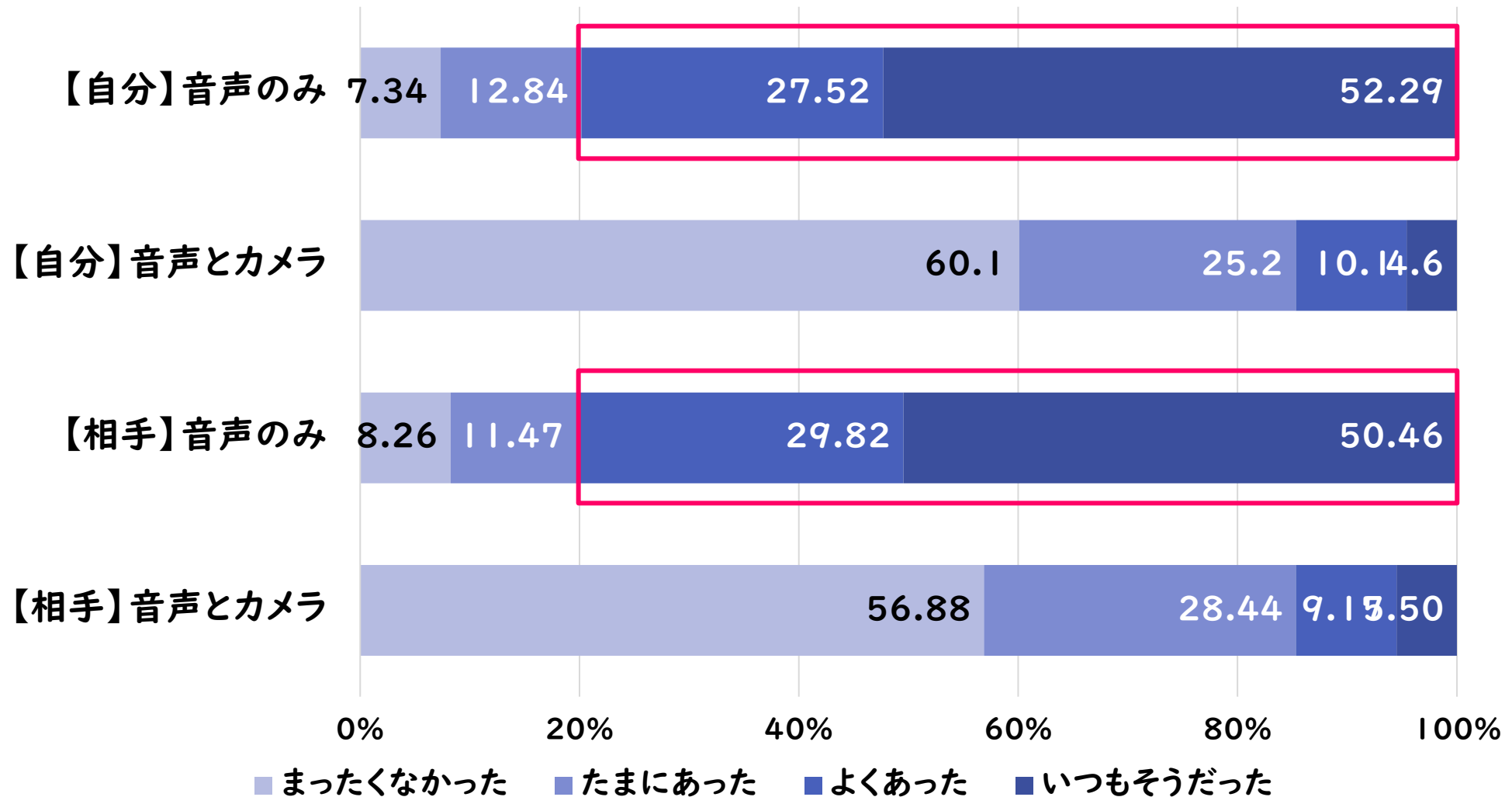
# 結果：つなぎっぱなしの経験 (%)

限定公開

# 結果：使用したツール

限定公開

# 結果：つなぎ方



# 結果：相手との関係

限定公開

結果：つなぎっぱなしにする時間

限定公開

# 結果：心もつながっていると感じるか

	%
まったくあてはまらない	11.47
あまりあてはまらない	11.47
どちらともいえない	24.77
ややあてはまる	34.40
とてもあてはまる	17.89

限定公開



# 結果：メディア利用時間の比較

- 「学習や勉強のため」以外は、「経験者」の方がメディア利用時間が長い

限定公開

# 結果：メディア利用時間の比較

- 経験者の方が「アルバイト」「友達と直接会って一緒に過ごす」時間が長い

限定公開

# 結果：友達との付き合い方

- どの因子も経験者の方が得点が高く、付き合い方に積極性がみられる

限定公開

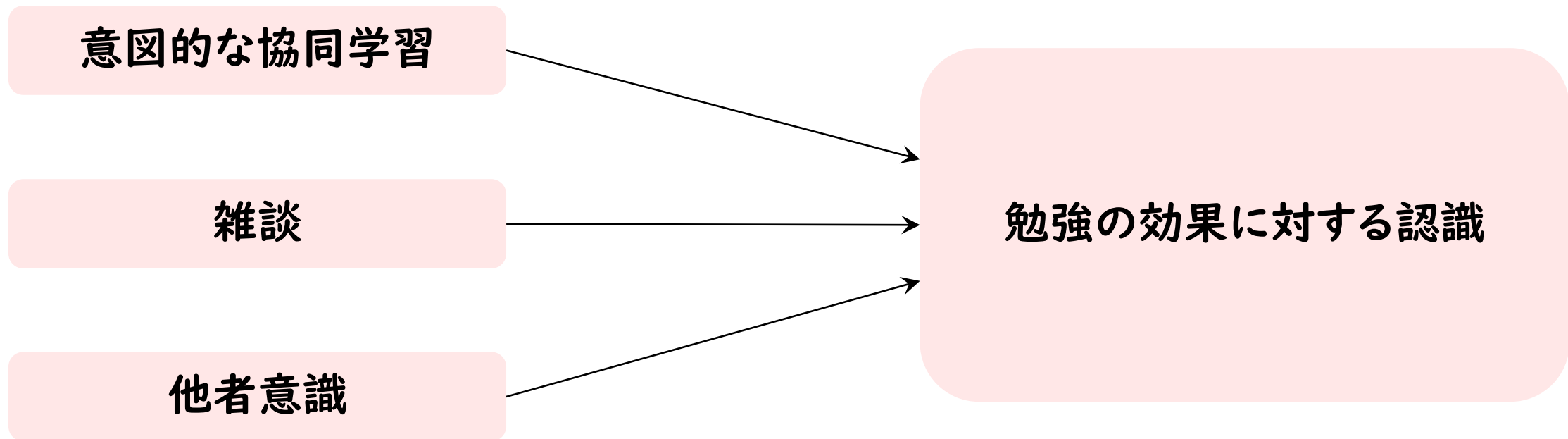
# 結果：友達と一緒に勉強する頻度

- (全体的に頻度は高くないものの) いずれも経験者の方が多い

限定公開

# 結果：つなぎっぱなしで一緒に勉強すること

- 一緒に勉強する際の相手との相互作用に関する3つの因子と勉強の効果に対する認識との関連（重回帰分析）（n=173）



# 結果：つなぎっぱなしで一緒に勉強すること

- 「意図的な協同学習」は正の関連
- 「雑談」は有意な関連をもたない
- 「他者意識」は「やる気が出る」以外で正の関連

限定公開

# 結果のまとめ・考察

## 【目的1】 つなぎっぱなしの実態について

- 2学期の間に半数以上が1度は「つなぎっぱなし」を経験していた
- LINEがもっともよく用いられていた  
高校生にとって身近なアプリが活用されている
- 相手は「普段から対面で会っている友達」がもっとも多かった

# 結果のまとめ・考察

【目的1】 つなぎっぱなしの実態について

- 5時間以上つながっている高校生も一定数いる
- 約半数は心理的なつながりを感じている



# 結果のまとめ・考察

## 【目的2】「つながりっぱなし」経験者はどのような特徴をもつか

### ● 経験者の方が対人関係に積極的

- ・経験者はスマートフォン、インターネット利用時間が長い  
特にコミュニケーションのための利用で非経験者との違いが大きい
- ・「放課後に友達と直接会って一緒に遊ぶ時間」も長い
- ・友達との付き合い方として、相互尊重欲求、親和欲求、同調欲求が高い
- ・友達と一緒に勉強する頻度も高い

➡ 対面でも、インターネット上でも（一緒にいるときも、帰宅してからも）  
積極的

# 結果のまとめ・考察

## 【目的3】 つなぎっぱなしで一緒に勉強することについて

- オンラインでつながった状態でお互いに教え合ったり不安なところを一緒に確認したりすることは、ひとりで勉強するよりもポジティブな効果を持つと認識されていた
- 「雑談」は学習の効果に対する認識とは関連しなかった
- 「他者意識」は、“集中できる” “成果があがる” “頑張れる” という点で、ひとりで勉強するよりもポジティブに認識されていた

【今後の課題】 実際の成果（成績など）との関連を検討すること